

---

# 中村梅とその一味

千原ゆき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

中村梅とその一味

### 【Nコード】

N9523F

### 【作者名】

千原ゆき

### 【あらすじ】

剣術道場の娘と四人の門下生＋近所の住人が繰り広げる、笑いあり？涙あり？ドキドキあり？の失笑ドタバタホームコメディ（仮）

## 其ノ壱【修栄館の朝】

時は江戸。とある町の中に小さな剣術道場があつた。名を『修栄館』。この道場では一人娘、中村梅と門下生四人を中心とした非常に下らない出来事が日々繰り広げられている。

修栄館の朝は、左手に鍋、右手にお玉を持った梅の掛け声から始まる。けたたましい音に目を覚ました住み込みの門下生達は、眠そうな目を擦りながらゆっくりとした足取りで居間へと向かった。

居間の中心には大きな机が一卓置かれている。その卓上には、黄金に輝く卵焼きと、採り立ての茄子で作られた漬物など、昨晚の残り物の煮物もあつたが誠に見事な朝食が並べられていた。

それぞれの茶碗に笑顔で釜から白飯を盛る梅。だが調理をしたのは彼女ではなく修栄館（じゅえい）の当主、梅の長兄平助である。

中村家は十三年前に母親を病気で亡くし、先代の修栄館当主であつた父親も八年前に他界していた。次男の新太は十五歳、末っ子の梅は九歳だつた。近くに頼れる親族もおらず、平助は弱冠十八歳にして家計を支えるべく一家の主となる事を決めた。そして八年前のその日から、家事はほぼ全て平助が行なつていた。当然今日の朝食も平助が用意したものだが、その中に得体の知れない奇妙な物体が一つ紛れ込んでいたのである。

「なあ、これ何？」

それを見て口を開いたのは門下生の一人、立川海次郎。年は梅より一つ上で甘味処の三男。幼少の頃より武士という存在に憧れ、反対する両親を見事説得して五年前に修栄館に入門した。甘味処の息子とあつてか昔から料理は得意であり、月に数回平助に代わって夕食を作つたり、余つた材料で菓子を作る事もあつた。

そんな海次郎から見てそれはかろうじて魚の形を保っているもの

の、ただの真つ黒に焦げた物体でしかなかった。最早何の魚なのかすら判別できない程に炭と灰でまみれている。いや、ここにいる者全て、きつと梅が焼いた魚であるだろうと想像はしていたのだが、敢えて何も言わなかった。

「何って鰺あじだけど」

梅の答えに誰しもが驚きを隠せなかった。これが鰺であることを証明してほしいと思つた程だ。

「鰺？　これが鰺？」

皿を手に、梅が鰺だと言つた魚を至近距離で確認する海次郎。この行動に当然梅は黙つていなかった。

「何よ！　ちよつと失敗しただけじゃん！　何か文句あるの？」

まだ全員分の白飯を盛り終わつていないのにも関わらず、しゃもじを片手に立ち上がる。

「こんな姿にされちまつて、鰺もさぞ無念だろうよ！」

海次郎も負けじと立つた。皿は持ったままだ。

「毎度毎度できねえならやるな！　おまえは握り飯だけ作つてりやいいんだよ！」

梅は自ら台所に立とうとすると必ず平助に拒まれるので、今までまともに料理をした事がなかった。唯一できるのは握り飯ぐらいだ。従つて梅がいつまで経つても料理が上達しないのは、半ば平助の責任でもあると言えよう。

「だからできるように練習してるんじゃない！」

「だったら毎日やれ！　じゃなきゃ上達するもんもせんわ！　こんなじゃ鰺も気持ち良く天に召されねえ！」

「何よ自分がちよつと料理できるからつて偉そうに！」

食卓に梅が作ったものが並べられるといつもこうだ。そしてこんな下らない言い争いを尻目に、門下生の一人、森崎もみじ椀が無言で梅の手からしゃもじを奪う。まだ空のままだった自分と別の門下生、柴田雪之助、そして梅の茶碗に黙々と白飯を盛っていく。

「何すんの椀！」

勢い余つて椀にまで食つてかかる梅だが

「飯が冷める」

の一言に渋々腰を落とした。

「海次郎もいい加減にしろ。いくら無残な姿とは言え、人が一生懸命作つたものに難癖つけるものじゃない」

無表情で平然と言い切るこの男、椀は寺子屋の長男。梅より二つ年上で学問に優れており、門下生四人の中で一番の常識人である。学だけでなく剣も強くあつてほしいとの両親の希望により、海次郎と同じ年の五年前に入門した。

「じゃあおまえ食べよ」

「遠慮する」

しかしながらこの発言もなかなか失礼である。

一方で、そのやり取りを見て笑っている雪之助。彼は四才の頃に両親と死別していた。近くに親族はいたが、家計が苦しく雪之助を養える余裕がなかった。それを知った梅の父親は、生前の雪之助の父親と大変仲が良かったため、雪之助を中村家に引き取っていた。

「まあまあ、賑やかでいいじゃないですか」

雪之助にとって修栄館は自分の居場所であり、家族でもある。煩くも笑顔の絶えない事を、雪之助はこれ以上ない幸福だと思っている。また、同じ年であり幼き日に両親を亡くしているという同じ境遇が、梅と雪之助を強く結び付けていた。

「何だ、まだ食べてなかったのか？」

襖を開けて入ってきたのは梅の兄、平助。手紙を出しに行つて来るから先に食べていなさいと梅に言っていたはずだ。しかし誰も朝食に手を付けていない、それどころか睨み合っている梅と海次郎の姿を見て、ああまたか。と溜め息を洩らした。

「平助さん、梅に台所に立たせるなつていつも言ってるでしょう」

黒焦げの鰯が乗った皿を平助の眼前に突き出す海次郎。

「梅、おまえまた勝手に……」

「だって平兄がやらせてくれないから！」

台所に立ちたいのにさせてもらえない梅は、こうして平助の目を盗んで勝手に何かを作るといふ事が度々あった。

「平助さん、食べましょう」

仲介に入るのはいつも椀で、その言葉に皆、箸を持つ。

「いただきます」

全員揃ったところでやっと食べ始めたが、味噌汁を口に含んだ時に思った事は

「……温い」

皆、同じだった。

「そう言えば新太は？」

口を開いたのは平助。

「知らない」

卵焼きを掴みながら梅が答える。

「どうせまた女でしょ」

中村家次男の新太は役者にでも見違えるような風貌の持ち主である。平助と梅もそれなりの容姿だが、新太は兄弟の中でも群を抜いていた。町の若い女は黙っていない。新太は毎日と言っていい程女を変え、夜遅くに家を出て朝や昼間に帰るなど日常茶飯事だ。そんな弟に呆れ顔の平助を横目に、お喋りをしながらの楽しい朝食の間は過ぎていった。

朝食も終わり、それぞれが食休みや稽古の準備を始める最中、突如廊下から慌しい足音が響いた。その人物は大きな音を立てて居間と台所を繋ぐ扉を開ける。この人物の名は松原桜外<sup>おうがい</sup>。この男も修栄館の門下生の一人だ。年は四人の中で一番の年長者、二十歳。そして四人の中で唯一住み込みでなく実家から通っている。いつもは時間に余裕を見て来る桜外だが、今日は珍しく寝坊をしたらしい。走ってきた勢いのまま居間の畳の上に倒れ込んだ。驚いた梅はどうしたの？と訊ねる。

「寝坊しちまつてさ、遅れると思って急いで来たんだけど意外に余裕だったわ」

乱れた息を整えながら桜外は説明をした。

「朝食は？」

「食ってねえ。何か余ってる？」

「ご飯しかないからおにぎりしかできないけど」

「十分だ。頼む」

それを聞いた梅は洗い物をしていた手を止め、釜から余っていた白飯を取り出した。軽く塩を付けて握れば、形は少々歪だが梅特製握り飯の完成だ。

「ん、美味い」

桜外はそれを口いっぱいに頬張った。形はどうであれ、梅の作る握り飯だけは塩加減が絶妙でなかなかの好評である。

それをペロリと平らげた桜外は食休みもそこそこに、一杯の茶だけ飲んで道場へと向かった。梅は洗い物の続きをした後、平助から頼まれていた用を足すべく草履を履く。そのとき僅かに違和感があったのだが、特に気にすることもなく町へ繰り出した。

## 其ノ式【豆腐屋慎司と梅の草履】

近所の商店はどれも昔からの馴染みばかりで、その中の瀬戸物焼き継ぎ屋をしている伊原家へ梅は向かった。昨夜の夕食後、食器を下げていた梅は手を滑らせ、誤って平助の茶碗を割ってしまったのだ。

瀬戸物焼き継ぎ屋とは、割れた瀬戸物を修理する事を専門とした職業である。元々は接着剤の代用に漆を使い、破片を繋ぎ合わせる方法だったが、寛政年間の中期頃からはガラスを粉末状にした《ふのり》と呼ばれるものや、白玉粉が主流になった。粉を加熱して接着し、再度焼き直す方法である。

伊原家の暖簾のれんを潜り店主を呼ぶと、奥から顎鬚を蓄えた体格の良い男が一人やつてくる。五十代半ばであるがこの男こそが店主の伊原正吉だ。

「何だい、梅ちゃんじゃねえか。うちに来るなんざ久しぶりだな」

「うん、ちよつとやつちゃって」

これなんだけど、と梅は出掛けに持ってきていた巾着から割れた茶碗を出し、正吉に渡す。

「随分と綺麗に割れたなあ」

「直る？」

「うん、これならすぐ終わるよ。だけど今さっき先客あつてな、それがちよつと時間かかりそうなんだ。七つ半頃には終わると思うが」

「じゃあ、またそれぐらいに取りに来るよ」

「ああ、悪いね」

正吉に小さく頭を下げた梅はその足で豆腐屋へ移動した。

稲葉豆腐店の店先では息子の慎司が大きな声で老婆とやり取りをしている。稲葉家は中村家の近くに住み、子供の慎司は幼い頃から梅と共に育ってきた、いわゆる幼馴染である。そして慎司の両親も梅達三人を実の子供のように可愛がってくれていた。一家の大黒柱

としてまだ半人前だった平助の手助けをし、新太と梅が悪い事をしたら本気で叱った。そんな稲葉家夫妻は中村三兄妹にとって親みtainなものである。

一方、慎司の向かいに立つて話している老婆の名は《とよ》。とよは代金を支払って、慎司は釣り銭を用意すべく一度店内へ戻る。しかしその間にとよは踵を返し、その場を去ろうとしていた。

「ばーちゃん！ 釣り！」

慎司が気付いた時には既に数歩離れた場所にいた。とよに聞こえるように、慎司はまた大きな声を出して呼び止める。なぜならとよは耳が遠く、最近少々痴呆気味なのだ。

「いつもすまないねえ」

「いいってことよ！」

一見どこにでもいる老婆のとよだが、若い頃は日本舞踊の師範をしていた。そのせいもあってか、品があり、物腰も柔らかく近所の人気者である。子供達からも「とよばーちゃん」と慕われていて、それは梅も慎司も同様の事だった。

「とよさん、こんにちは。とよさんも豆腐買いに来たの？」

慎司がとよに釣り銭を渡していたちょうどその頃、稲葉豆腐店に到着した梅は二人の姿が視界に入り声を掛けた。

「ええ、そうだよ。豆腐はここのが一番美味しいからね。梅ちゃんの家も今晚は豆腐かい？」

「そうみたい。最近肌寒いから湯豆腐にするんだって」

まだ昼前だが、昼食後の妻達の井戸端会議のような光景になりそうなので慎司が割って入る。

「ばーちゃん時間いいのか？ 孫が遊びに来るんだろ？」

「ああ、そうだった。じゃあ梅ちゃん、慎司君、またね」

「うん、またね！」

初対面の人間から見ても、きつとこの老婆は心優しい人なのだろう。そう思える程の笑顔を振り撒き、とよはゆったりとした足で二人の後ろにした。梅はとよの背中を見送った後、慎司の方に振り

返る。

「で、今晚湯豆腐なんだけど、いいのある？」

「それなら今日は上玉があるぜ」

今朝いい豆が入ったから腕によりをかけて作った、と腕組をしなから自慢気に答える。しかし梅は

「慎司が作ったの？ 食べれるの？」

まるで疑うかのような視線を慎司に送った。

「お前にだけは言われたくねーな」

「あはは、冗談だよ。最近また一段と上手くなったもんね」

「当然だろ。毎日親父の手ほどき受けてんだ。不味いわけねーよ」

言いながら慎司は水槽に手を入れ、朝早くから起きて作り上げた自慢の豆腐に手を伸ばした。

「でもおじさんの味を超えるのはまだまだ先だね」

「うるせえな。いいんだよそのうち追い抜くから」

大きな水槽から小さな桶に移された豆腐は、水音を立てながら愉快に揺れている。代金を支払い、梅は豆腐の入った桶を二つ重ねて持ち上げた。

「気をつけろよ」

「うん。ありがとね」

店の奥で仕事をしていた慎司の両親に軽く会釈をして、梅は帰路に着く。

途中、近所の子供達とすれ違った。町内を元気に駆け回る小さな少年少女は、まるで幼き日の梅と慎司、そして雪之助のようだ。この子供達も、自分達がよく遊んだ大きな広場へ向かうのだろう、そう思うと何だか懐かしくなった。

しかしそんな梅の胸中を知らず、足元の草履はきしきしと厭な音を立てている。それはとても小さく、まだ梅の耳に届く事はなかった。

「お姉ちゃんどいて！」

角を曲がればもうすぐ我が家に辿り着くといったところで、脇道

から聞こえた子供の声。それは五才くらいの女の子で、さっきの子供達と鬼ごっこでもしていたのだろうか。梅はぶつからないようにと咄嗟に体を捻る。しかしそれがいけなかった。梅の右足 いや、草履からは、ブチッと鈍い音が響き、流石に気付いた梅は足元を見下ろした。

「あ　っ！」

見事に鼻緒が切れていた。

かろうじて豆腐は無事だが、今履いている草履は、二年前の誕生日に雪之助達四人がお金を出し合って梅に送ったもの。毎日履き続けてもうかなり古びているのだが、それでも梅は気に入って棄てる事などしなかった。

これには梅は落ち込み、全身の血の気が引いた。そして今朝、草履を履いた際の違和感はこれだったのか、と妙に納得する。家まで後僅かな距離なのに、これほど遠く感じたのは後にも先にもこの日が初めてだろう。梅はどんよりとした面持ちのまま怪我人のように足を引きずって、やっとの思いで家に着く事ができた。

門を潜ると、道場の庭先には二つの人影。梅はゆっくりその正体に近付いた。しかし声を掛ける事をせずに背後からじっと見つめている。

嫌な気配がする。そう海次郎は感じ、恐る恐る振り返った。

「うわ！」

そこにはこの世のものとは思えない、まるで幽霊と間違えられてもおかしくない程に落ち込んだ梅がいて、その様子に海次郎も驚いた。

「おまえ、声ぐらい掛けるよ！」

「……………」

しかし梅は無言のまま俯いて、その場に立ち尽くしたままだ。  
「どうした？　何かあったのか？」

海次郎と正反対の優しい椀の声色に、梅は何か切れたかのように突然泣き出してしまった。いつも強気で涙など滅多に見せる事のない梅だ。余程の事があったのだろうと推測した二人だが、何が何だか分らず固まってしまった。

そこへ休憩が終わりだと知らせに雪之助が歩いてくる。

「あ、梅おかえり……ってどうしたの？」

当然雪之助も驚き、梅の顔を覗き込んだ。

「まさか、また海次郎さんに苛められた？」

「違えよ！」

同時に梅も首を横に振る。

「こいつがいきなり泣き出したんだよ」

「え？ いきなり？」

「そうだ。俺達にはさっぱり分からん」

両手が桶で塞がれている梅は流れる涙を拭う事ができずに、小さな肩を小刻みに震わせているだけ。見かねた椀は

「とりあえず置け」

と、桶を取り上げて、着ていた着物の袖で梅の涙を拭ってやる。すると、しゃくり上げた小さな声で、やっと話し始めた。

「ぞ……り、が……」

「何？ 聞こえねえ」

「おまえは黙っている」

苛ついているのだろう、いつにも増して乱暴な口調になる海次郎を一喝し、梅を優しく諭す椀。

「草履が壊れちゃった！」

啜り泣いていたかと思えば、今度は大声で喚き出す。その言葉に

三人は梅の足元に目をやって、海次郎と椀は揃って溜め息を吐いた。

「そんな事か」

「泣く程の事じゃねーだろ」

「だってっ！ せつかく皆が買ってくれたのに！」

違和感を感じたときに確認していればよかったと、梅は嘆いた。

そんな姿を見て、堪らず海次郎は声を張り上げる。

「下らねえ！」

「よせ、海次郎」

「いや、下らねえよ。おまえがそんな事で泣くタマか？ 普段どんな事あつても絶対泣かねえくせに」

ピクリ、梅は反応する。

「あんたにとつてはどうでもよくても私にとつては大切なものなの！」

「だからって泣く事ねえだろうが！ 直せばまた履けるだろ！ ほんつとに下らねえなおまえはよ」

先に戻っていると言つて、後の事は二人に任せて早々とその場を去る海次郎。言葉は悪いがこれが彼なりの慰め方なのである。顔を見ればいがみ合う間柄だが、決してお互い嫌っているわけではない。単に海次郎は、梅に「気にするな」と言いたかつただけなのだ。

一方、その場に残された雪之助と椋は、梅にこんな話をしていた。「いいか梅、形ある物はいつか壊れる。それがたまたま今日だった。それだけの事だ」

「そうだよ。それに海次郎さんの言つてた通り、直せばまだ履けるしね」

梅がこの草履を気に入っていた事も、大切にしていた事も、皆知っている。だからこそ梅が泣く程に落ち込んでしまった事も、手に取るように分かるのだ。

「さて、悪いが俺達はもう戻らなければいけない。今日はまだ出掛ける予定あるのか？」

「夕刻また正吉おじさんのお店に」

加えて、先約があつて時間が掛かりそうだと言われた事を説明する。

「そうか。では草履は俺達で何とかしておくから、その間は代わりのものを履いて行つてくれ。雪之助、行くぞ」

「はい。じゃあ梅、また後でね」

それだけ言つて二人は道場の中へ戻つた。梅はもう一度桶を抱え、鼻緒の切れた草履をずるずる引きずりながら玄関の扉を開ける。  
ちりん、ちりん、と鈴の音が高く響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9523f/>

---

中村梅とその一味

2010年10月28日04時54分発行